

基本教育としてのおはなし

大塚 喜一

幼児へのお話の獨特の情景・心もち・味はひといふべきものについて申上げ、後に概論的に項目に分けて述べたいと思ひます。

凡そ子供はみな話を聞きたいのではあるけれども、特に幼児はお話のすぢよりもお話によつて開かれて来る親と子との、保母と幼児との心の融和^{○○○○}と交流の世界が面白くて楽しいのです。だから幼児はお母さんのお話、自分の受持の先生のお話を聞きたい。その心持を満足させてやる事が幼稚園に於けるお話の非常に大切な使命となるのであります。

(註、此事を徹底的に述べやうと思へば、當然嬰兒期のお話から述べ初めねばなりません。餘りに長くなりますからこゝでは幼稚園時代だけにしておきます。子供の「教養」の昭和五年十月號に上澤謙二先生が「赤ちやんへのお話について」と題して滋味あふるゝばかりの玉文をのせて居られますから、心ある方はそれについて御覽になれば

生命的な感銘を得られるであらうと思ひます。同誌の發行所は東京市外阿佐ヶ谷三四八子供の教養社です。)

保育の一番大切な事は、保母と幼児との人間交渉に依つて幼児の人格の基本的陶冶が出來てゆく所にあります。此見地から各保育項目を眺めますと、「おはなし」は保母が直接幼児に對する 格的交渉であるといふ獨特の教育的性能が認められ、従つて「おはなし」は保育の中心である」と申してよいと思ふのであります。翻へつて、私共が實際保育について常に感じます事は、我々は大人である、然るに幼児達は『幼児の世界』に住んでゐる子供であつて、其の間に互に別々の世界に住んでゐるといふ様な感じが多分にありはしないかと思ふ。子供はその純真なる本性を赤裸々に表して「お母さん！」といつて慕つて來ます、「先生！」といつて飛びついて來ます。それに對して我々は満心の同情と共鳴とを捧げたいのです。然るに悲しいかな大人とし

ての心が働くが爲に、其中で最も警戒しなければならぬのは所謂教育者としての特別の心持が働くが爲に、折角心の扉を開放して飛び込んで来て呉れる幼児達に對して充分の満足を与へてゐない。子供と我々との間に解け難い塊りのやうな或は紙一枚の隔りのやうなものがあはしなないかといふ氣がして、それを除きたい。除きたいといふ事は吾々の非常な苦心であらうと思ふのであります。此際、我々を『幼兒の世界』へ導いて呉れる案内者媒介者となるものが即ち幼兒へのお話であると思ふのです。そこで我々は幼兒獨特の物の見方感じ方例へば幼な心へのお話の構成要素としての體験的だとか律動的だとかの特質（長尾豊氏著幼稚園ばなし第一集第二集、及本誌昨年三月號拙稿「幼な心へのお話について」を参照せられたし）について學んでゆく中に、今迄何の氣もなく聞き流し見のがしてゐた幼兒の一言一行にホントに子供らしい味はひのある事がわかつて来て、例へばお馬がカツポカツポ、雀がチヌチヌチヌ、チヌチヌチヌ、太鼓がタンタンタン、タタタタン！ 等いふ様な韻律的語句の面白味等が段々と實感されて来るやうになるのであります。かうして書物で學んだ事が單に兒童

心理や童話研究の知識として止つてゐるだけでなく、子供と遊んでゐる間に體驗化されて來るといふ事は、子供の友として許されたる我々の貴重なる特權であつて、我々は斯くして子供から基本教育としてのおはなしの態度を學ぶべきであります。従つて幼稚園に於ては、個人對話とおはなしとの兩者は互に融通性のものであつて、互に他を助け合つて進んでゆく事によつて、基本教育としてのお話の特質が體現せられるのであります。保育は即ち基本教育であつて、若し方法と云へば生活による教育なのでありますから他の時期と比較して幼兒期のおはなしの特質を求むれば當然此處に歸着する譯であります。この所は幼稚園の先生方にどうかよくわかかつて頂きたいのであります。扱て此處で最初の問題に歸りますが、かうして我々が幼兒へのお話に段々習熟するやうになつて参りますと、お話を迎じて樂しみ得た幼兒との心の交流の世界が、お話以外の平生の人間交渉の場面にも浸み込み、うるほひを與へて行つて、今迄の大人らしい心持や言葉や態度等が段々と『幼兒の世界』の心持や言葉や態度に純化されて來るのであります。此間の微妙な情景を若し子供に代つて解説する事が許されま

らは、子供の心持は恐らく次の様でありませう」あの先生はお話を私達に段々面白く聴かせて下さる様になつて来た。

それと同時に一緒に遊んでゐても私達の心持がよくわかつて下さるやうに思ふ。最初から私の先生として求めてゐた心もちが此頃になつて十分に満されるやうになつた。入り難かつた入口が開いて来たやうな、穴があいてゐた所が満されたやうな……これこそ私の先生だ！と。餘りに立入つた言葉を用ひまして濟まない様な氣がしますけれど、先生方が日々の保育生活に於て子どもたちと親しんで頂く上に幾分の御参考ともなり得ますならば、多くの子供たちから小生が受けて来た純情に報ゆるの一端ともならうと思つて、何とかして表現して見やうと苦心した次第です。

ホントに子どもたちの純情ほど有難い力強いものはありません。それを事實に明白に立證されてゐる鈴木すみ子先生の「一年生を持つてみて」と題せられたる體験談を本誌昨年十一月號に紹介させて頂きましたから、本文を此處まで読んで來られた方は是非それと對照して御覽を願ひます。實際一度幼な心へのお話のコツを握られた先生は、どうしてあんなに子供達から慕はれるであらうか、と不思議に思

はれる様であります。お話をしてゐられる時の態度を見ても、もとより一生懸命にはしてゐられますけれども、決して大聲を出すとか又は妙に固くなるとかいふ様な無理な苦しさうな所は少しも無く、極く樂に、極く自然に、今話してゐる子供達と一つに融け合つておはなしの世界即ち幼児の世界を自由に游泳してゐられる有様は、傍聴してゐる者迄もその中に引入れられる程であります。斯うした境地は各方面の體験と研究とが有機的に結合された成果であつて其詳細は後に述べますが、此の綜合が出来てゆく中心的な働きをなす所の大切な態度について先づ知つて頂きたい。第一には、幼児の心を以て話材を讀むか又は思ひ浮べて見る事です。此際特に言葉に注意して、その言葉が子供の心にどう響くか、子供としてリズムのどの點、反復のどこが面白いかをよく味つてゆくのです。そして、これはよい話であると思へば、その同じ話材を何回も繰返して話すがよい。「おはなし」とは決して書物に書かれた童話の材料そのものではなく、それが話される時に生ずる保姆と幼児との心の交流を云ふのですから、話材が幼児の心に入り易い様に話者の心に理解されてゐるならば、それを何回も繰

返して話してゆく度毎に心の交流は一回毎に新しく、しかも次第に深められてゆくのであつて、此處に幼稚園のおはなし獨特の面白味が湧いて來るのであります。斯くして周なる用意と、自然にして單純なる話方の態度と、眞實なる反省とに依つて爲された一つ一つのおはなしの記録を保育日記に残しておきますと、その體験が一ケ年位重ります中、其先生自身のお話の材料が蒐集せられたことになります。それは童話の本から一寸讀んだといふやうなかりものではなく、實に自分の血と涙との通つた自分と子供とをつなぐ心の絆ともいふべき生きたお話集であります。それが二年三年と經驗を積むに従つて、一つの題材を通じて自分の保育體験が如何なる経路をとつて進んで來たかがよくわかります。いざおはなしとなれば、いつでもこの日記の中から其時と處と人とに適當なものを選び出せばよいので僅かな時の間に今話さんとする題材についての過去の經驗を思ひ起して心構へを定める事が出來ます。かうしてホントウに自分のものに同化された「おはなし」が一つづつ出來る毎に、實に何物にも替へ難い大切な心の糧を得た心地がするでせう。この「おはなし」によつて自分はいつとも子供

たちと親しい心の交流融和を味はふ事が出來る。自分のおはなしをきいてくれる子供たちの心がこのおはなしと離すことが出來ないやうに融合されて自分の胸に抱かれてゐるのであります。かうした心もちを味はひ得た先生は、今かうして一人で本文を讀んでゐられても、自分の周圍には多くの幼児が取巻いてゐるやうな祝福された氣持で満たされてゐられるでございませう。おはなしは實に茲に至れば人生の基調であり心の光であります。斯くして内から發せられた心光は、その先生の保育生活全般に漲り輝いて來ずにはおかぬでございませう。「おはなしは保育の中心である」との言葉は茲に至つて更に深く味はれるのであります。

本題の要點は、基本教育としての特質を徹底せしめむが爲には幼稚園及小學校幼學年のおはなしに於て如何なる態度をとるべきかといふ事であります。童話及話術に就ての一般論は夫々の著書に譲ることとし、茲には右の要點より見て實際家の指針となるべき大切な事のみを述べます。便宜上、項目に分けて述べますが、是等は何れも中心的なる本體を各方面より觀たるものでありますから、讀者は前に表現せる心もちを以て之を讀まれ、以てこの本體を

把握せられむ事を望みます。尙本文を記すに當り、筆者は日本童話聯盟主事松美佐雄先生のお書きになつたものとおはなしとより教へらるゝ事最も多かりしを謹で謝意を表します。

一、原理 保育——基本教育

A 本質原理は『未分化の教育』でありまして、この原理から、幼な心へのお話の構成要素として直觀的、體験的、秩序的、律動的なるものを選びべきであります。

(話方研究第四卷第一號参照)この中で『體験的』といふ事が最も大切であります。智情意未分の具體生活を爲せる幼児は、すべてのものを生きた姿に於て受入れ日發表せんとしてゐますから、かうした生活に受入れらるゝ様な生きた材料を選んでお話を構成しそれが幼児の心の中に入つておのづからなる力によつて生育してゆくやうにおはなしすべきである。

B 方法原理は『生活による教育』でありましてこの原理から保母と幼児との人間交渉と「おはなし」とが互に助け合ひながら進んでゆき、幼児の求める一人間性」と「おはなし」との兩方面の要求を一節として満してゆ

く事に依つて基本教育としてのおはなしの使命を全うし得る譯であります。保母と幼児との個人對話は實にかうしたおはなしによる基本的人間教育の出來てゆく素地を作りつゝあるものであつて、一見平凡事の如くに見ゆる日々の雑談を最も純眞卒直潑刺たる人間交渉にまで深めてゆくやうに保母は幼児の心に隨伴し共感共鳴しつゝこれをいたはり育てゝゆくべきであります。此處の所は實に本文全體の基調をなすべき大切なところであります。筆者は之を正當に適切に表現すべき言葉を見出さんとして苦心したのであります。讀者諸士は何卒前に述べたる所と對照してよく其の眞諦を體得せられむ事を望みます。

二、幼児の心理の理解

A 満一—三歳頃(幼稚園に來るまで)

此時期に於ける母と子との對話は實に「おはなし」が嬰兒の心の環境に入り來る根源を培ふもので、斯くして子供は言葉をおぼえ、やがて萬物に對するしたしみが養はれて參ります。教育の根本をなす親心子心の融和はこの最初期のおはなしを通じて深められ益々眞實に味はる

、やうになるのであつて、従つて後の各時期のおはなしを可能ならしめ、實効を擧げしむる素地を形成しつゝある時期であります。

B 満三—五歳頃（年少組）韻律愛好時期

此時期の幼児は、韻律的な語句、事件又は表現の反覆動物の鳴聲等を含むおはなしを喜びます。その興味と注意とは幼児が日常見なれ聞きなれてゐる現實の事物の上に向つてゐるが、幼児の心に入り来る事物はすべて幼児と同じ世界に住み同じ思想感情を有してゐると思つてゐる。例へば「篠の葉がおいで、おいでをしてゐる」「お月様が私を追ひかけて来る」「お饅頭がおいちいと言つてゐる」等いふ如く、現實の事物に對する人格的交渉が此の時期の心理の特色である。大人の眼からは空想と見えても幼児にとりては醇乎たる現實であり、むしろ現實とか空想とかの分化的判断以前の純一なる幼児の世界なのであります。

C 満五—八歳頃（年長組及小學校幼學年）

想像馳聘時期

此時期に入れば、幼児は自己が現實に寫さんと欲して

爲し得ざる事を想像の世界に於て爲すと假想する事に大なる愉快を感じる様になる、この假想を實在と信ずる世界を假象の世界といふのであつて、幼児の心を斯かる世界に誘き入れ、現實の大人の世界では味ひ得ぬ此時期獨特の想像力を擅に活躍せしめるやうなおはなしを最も愛好するのである。

次に、此時期の幼児は一面又甚しく探求的である。昨年十月名古屋に於ける第五回全國幼稚園關係者大會に於て（同會記録一五〇頁参照）久留島先生は、幼稚園に於けるお話は首尾完了したる童話のみに限るべきではない旨を方説せられ、

『子供の心の閃きは總てのものに對して驚きの目を見はり、總てのものを知る事に安心と喜とを得る。之が子供が常に話を求める心の立場であつて、従つて彼等は常に何物に向つても、「何故?」「どうして?」「誰が?」「何を?」「どこで?」と云ふ。斯かる心理に適合する様に疑ひの解決、或は彼等の不安に對する説明をして安心を與へる事が幼稚園のお話の基本になるべきである』との主旨を述べられましたのは、實に我々の實行上の

指導原理であり中心精神であると思ひます。この主旨を前に個人對話が大切であると述べた所と對照して御覽になれば、この解決といひ説明といふは幼児より見ての事であつて前に基本教育の方法の原理として一般的に述べた實際の情景の一々が明になつて來ることと思ひます。而して、斯かる好奇的探求心に應ずべき童話を求むれば即ち「事物起原説明話」と稱せらるゝ種類のものでもあります。

(註) B C 各項に就ては松村武雄博士著 童話及兒童の研究 培風館發行 を參照せられたし)

三、おはなしの前・中・後

(前) 話材はなるべく幼児に適するやさしいものを選ぶがよい。かうした話の面白味を感じし得る心は

(イ) 幼児の心理の研究、發生的及精神分析學的考察

(ロ) 幼児との相互生活、殊に幼稚園の朝の個人對話によつて子供に親しむと共に子供から學ぶこと

の二方面から養はれる。この心を以て今語らむとするお話を一通り讀むか又は思ひ浮べる事が大切です。

此際特に言葉に注意し且お話の中の一々の光景と之に

伴ふ心の動きとを鮮明に切實に實感してゆくのである。お話の成敗とその効果とはもとより、殊に話者としての修養の進度は、このお話の前の心構へによつて其大半が決せられるのである。

(中) お話の態度は單純・直接的・戲曲的なるを要する。而してかゝる態度は、前に述べた周到なる準備に依て養はるゝ童話に對する話者の純眞なる感情から自然に生ずるものである。山崎光子女史がその著「お話の研究」に於て戲曲的態度を論じて、

『話者が或る童話を話してゐる中に、話中の人物の動作や事件の發動等に關する意識が内心に傳はつて内部からの刺戟が運動神經に作用して、不知不識の間に肩を上げ眼を張り音聲に變化を生ぜしめる等の事は、最も自然な——寧ろ生理的な作用である』

と云はれたるは最も明に此間の消息を語るものである。

特に幼稚園のお話に於ては、感情表現の發生的形式に意を用ひ、一つ一つの言葉のひびきを正確に適切に表現する事に努むべきである。

又、保姆はなるべく椅子に腰をかけておはなしをすれば、落つて樂に出來て、幼稚園にふさはしい態度が自然に得られる事と思ふ。

(後) 自分のしたおはなしに就て其當時の情景殊に話者としての自己の心の動きを書き記す事は、健實なる進歩の原動力ともなるべき重要な努力である。斯かる心の記録は僅か數分時のおはなしを中心としてその前の周到なる準備よりその後の幼兒の創造的反應に至るまで、話者幼兒との生活記録全般に進展し行くであらう。數行の文字の中にも、話者の内心の告白があり、幼兒に對する感謝があり、おはなしの世界に住む者の責任と愉快と希望と感激とが生々しき心の體驗として書き記されてゐる。話者自身が熱心であればある程、この日誌は自己にとりては既往の研究と體驗とを反省して今後の方向と態度とを啓示する指針としての價値を益々發揮する。又同志の友にとりてはその智能と經驗との足らざるを補ひ誤れるを正すの道しるべとなる事もあらう。殊に同じ話材を一回毎に新しく生かしておはなしして行くにはこの日

誌は無くてはならぬ大切な導きであります。本文を編せる目的も實に斯かるお話の日誌を讀者の一人々々が記してゆかれる事に依て事實上達成せられる譯でありますから、筆者は本誌を通じて又は年々の聯合保育會其他の諸會合に於てその輝かしき成果を發表せられむ事を今より期待する者であります。(殊にホントウにお話を研究して行かうといふ熱意ある保姆諸彦の御會合ならば、たとひ小數なりとも小生も出來得る限り御相談に應じ喜んで共に研研して行きたいと思ひます。)

四、保姆の人生の基調としてのおはなし

實に被教育者と教育者との二つの心。伸びてゆく二つの生命が融和協同して一つになつて働く時、そこに眞實の教育を見ることが出来るのであります。保姆と幼兒とがこうした心の融和に入る上におはなしが如何に大切であるかがわかれば、この眞實の教育の中から保姆としての樂しき人生が開かれて來ることは、最も明かなる自然の常理であることがわかりませう。

(昭和七・四・二六)